

ビハラー活動の現在

打 本 弘 祐

一、はじめに

東日本大震災以降、テレビや各マスコミにおいて宗教者による心のケアという表現に違和感がなくなり、宗教と臨床の(再)接近と評される臨床宗教師の活躍を始め、僧侶の寺院での取り組みや社会実践に注目が集まっている。宗教学者の島菌進は、昨今、自身が関わる領域において、仏教教団が関与を進めたり、あるいは求められている。「社会のさまざまな苦難」「公共的問題」「教育と文化継承」に関わる十の領域をあげ、それらに対して仏教教団が特定宗教・宗派の枠組を超えて、公共領域へと宗教(宗派)の多元性や相対性を十分意識した上で関与していることを指摘する。その中でも好例として医療とケアを挙げ、特にホスピス・緩和ケア領域における宗教的／スピリチュアルな次元へのケアの欠落を補完するスピリチュアルケア提供者の需要の高まりに⁽¹⁾応じて、「日本の仏教教団もこうした状況に応じてビハラー活動に積極的に乗り出すようになってい⁽¹⁾る」と記述している。

この島菌の指摘から三年後、ビハラーは田宮仁によって仏教ホスピスという表現に替わる「仏教を背景としたターミナルケア施設の呼称」として提唱されてから三〇年の節目を迎えた。この三〇年間に、ビハラーは田宮が標榜

した「仏教を背景としたターミナルケア施設の呼称」のみならず、医療全般や社会福祉における仏教者の活動がビハール活動と呼ばれるようになった。また、田宮が唱道した仏教超宗派による活動に留まらず、島菌が指摘するように、教団が積極的にビハール活動を支援する浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派）も現れた。

このような展開に即したビハールの再定義については、すでに二〇〇七年に谷山洋三によって発表され、多くの研究が依拠するところである。だが、谷山の論考発表から現在に至る一〇年以上の月日を鑑みると、再検討する時機にきているのではないだろうか。その上で新たな分類を提起し、ビハール活動の現在を考察することは一定の意義があると考ええる。

よって本稿は、まず提唱時の田宮によるビハールを簡略に確認したあと、主に谷山による分類の再検討と補足をを行う。その上で現在のビハール活動の分類について新たな視点を提示することを目的とする。その過程で、特に本願寺派における近年のビハール活動の動向について論じることとする。

二、ビハール活動の展開

まず田宮によるビハール提唱の意図と、ホスピス・緩和ケア領域におけるビハールの展開を簡略にまとめておく。

ビハールは、キリスト教を主体としたホスピスとの宗教的立場の違いを明確にするため、一九八五（昭和六〇）年に田宮仁によって提唱された。田宮は、当時言われていた木に竹を接ぐような仏教ホスピスという表現ではなく、キリスト教の伝統の中から生まれたホスピスという言葉の歴史を尊重すること、そして仏教の主体性を打ち出す言葉を生み出し、仏教における看取りを創造せんとする思いと共に次のように述べている。

「ビハール」の提唱は、医師免許も看護師の資格も持たない患者側からの「私が利用したい最期の場」の創造であり、「私のいのちを他人任せにしたくない」という意思の表明であった。また、ビハールは仏教の立場からのターミナルケアの問題に対する具体的な対応策の一つとしての提案でもあった。それは、「葬式仏教」などと批判されている日本仏教の現状を反省し、「いのち」を巡る「生死」の問題を最重要課題の一つとしている仏教本来の目的に立ち返ったところから生まれたものであった。⁽³⁾

このように田宮は、一人称の視点とも言うべき老病死の苦悩を抱える患者の立場からの提言として、また同時に、仏教的ターミナルケアの観点から、葬式仏教だけではない仏教の新たな社会運動としてビハールを提唱したのであった。

近年盛んである宗教の社会貢献の議論に先駆けて、ホスピス・緩和ケアへの積極的な参画を意図して提唱されたビハールは、一九九二（平成四）年五月に田宮の兄が院長を務める崇徳会長岡西病院の五階に長岡西病院ビハール病棟（以下、長岡西病院）が開設されたことにより具現化された。

長岡西病院の特徴は、日本的看取りの創造を目指し、日本の伝統文化や風土、何より新潟県長岡市という地域性を発揮すべく仏教的要素を病棟に反映させている点にある。特に地域の超宗派仏教僧侶のボランティアによる「仏教者ビハールの会」を中心とした活動は、初代仏教者ビハールの会代表であった木曾隆（本願寺派）が「一宗一派の伝道活動はしない。宗派エゴを出さない」と述べるように、あくまでも超宗派仏教僧侶による協働体制を堅持した。患者訪問や、病棟内に釈迦菩薩像を安置した仏堂において朝夕の礼拝、花まつり、盂蘭盆会、春秋彼岸会などの仏教行事、長岡花火大会の観覧やその他の各種イベントの手伝いなどを超宗派のボランティア・ビハール僧たちが行っている。

また、長岡西病院では、患者訪問はもとより、ボランティア・ビハラー僧の調整や病棟の医療者達との橋渡し等、仏教者の活動の中心軸として常勤ビハラー僧が病棟に勤務していることも特筆すべき事であった。その存在は二〇〇八(平成二〇)年四月にあそかビハラークリニック(現在のあそかビハラー病院)が開設され、常駐僧侶が配置されるまで、国内唯一の病院付き僧侶として注目を集め続けた。

長岡西病院開設の後、田宮の目指した仏教を基調とした日本的ターミナルケア施設としてビハラーを冠した病院は、二〇〇四(平成一六)年四月開設の宗教学法人立正佼成会附属佼成病院緩和ケア・ビハラー病棟(以下「佼成病院」)、一般財団法人本願寺ビハラー医療福祉会あそかビハラー病院(以下「あそかビハラー」)。なお、開設時は大日本仏教慈善会財団あそかビハラークリニック)、二〇一七(平成二九)年六月開設、医療法人聖恵会福岡聖恵病院聖恵ビハラー(以下「聖恵ビハラー」)の三つが新たに開設され、二〇一九(令和元)年一〇月の時点で四病院となった。

これらの病院においては、施設というハードのみならず仏教者がスタッフとして関与している。長岡西病院、あそかビハラー、聖恵ビハラーは常勤(長岡西病院は二〇一八年四月から非常勤)の僧侶が勤務しており、佼成病院は別部門である佼成カウンセリング研究所に所属する心の相談員(スピリチュアルケアカウンセラー)を中心とし、他宗の僧侶がボランティアとして病棟に関わっている。

また、提唱から三〇年の節目に長岡西病院のビハラー僧体制が変化を見せた。これまでの常勤ビハラー僧を廃し、新たに地域の仏教僧侶四名を専任ビハラー僧に任命し、彼らの輪番制へと体制を変更したのである。彼らはこれまでの常勤ビハラー僧の役割を受け継ぎ、病棟内仏堂での勤行や各種仏教行事の執行、お別れ会、仏堂管理を始め、医療者との連携やカンファレンスへの参加、遺族会や「仏教者ビハラーの会」との連携を担っている。筆者は、専

任ビハラー僧間の情報共有、患者・家族への機を見るに敏な関わりや、医療者との切れ目のない連携などに難しさを抱えることになったと捉えるが、実際の体制変更に伴う課題あるいは成果についてはまだ明らかになっていない。今後、長岡西病院の専任ビハラー僧からの発信を待ちたいところである。

このようにホスピス・緩和ケア領域におけるビハラーは徐々にではあるが、ハード(施設)と共にソフト(人材)を増やしてきた。とりわけ本願寺派を設立母体とするあそかビハラーは、ビハラー活動者の養成機関として独自の研修プログラムを整備している。また、二〇一七年からは本願寺派社会部と共に、「ビハラー僧養成研修(仮称)【試行】」(以下、ビハラー僧養成研修と表記)に取り組んでおり、修了生をビハラー関連の医療福祉機関へ輩出する成果を挙げている。彼らの活躍の場はホスピス・緩和ケア領域に留まらず、社会福祉領域にも広がっている。筆者の経験からも介護施設における看取りや、高齢者施設における利用者の宗教的ペインへの対応に、ビハラー僧が果たす役割は大きい⁷⁾。現在ではまだ少数だが、今後、高齢者施設におけるビハラー僧の増加も期待される。

高齢者施設におけるビハラー僧のニーズに合わせた活動は、「仏教を背景としたターミナルケア施設の呼称」というビハラーの概念的枠組みを横溢した、実践的活動領域の拡大を物語っている。そもそも提唱者の田宮自身が「現在では、ビハラーという言葉が独り歩きを始め、筆者の提唱したビハラーの定義は最狭義のものとなってしまう」と述べているものの、「ビハラーの提唱は仏教社会福祉研究の途上で生じた問題」であり、「救いということを視野に入れた仏教福祉の可能性を実証する意図もあつた」とも論じている。さらに、医療施設のみならず福祉施設においても、チャプレン同様に専従するビハラー僧の養成を視野に入れていたこと等を踏まえると、筆者には、田宮にとってビハラーの語が指し示す活動領域の拡大や人材養成への展開はむしろ当然であり、予見されていた出来事であつたと思われる。

三、ビハーラ活動の分類

ビハーラの名のもと、仏教者による社会活動が幅を広げた結果として、その実態が把握しにくい状況も生じている。

例えば早島理と横尾美智代は、本願寺派ビハーラ活動者養成研修会に参加している研修生に向けたアンケート調査の自由記載分析から、「あれもこれもビハーラ?」「何がビハーラ活動なの?」という研修生の戸惑いの声をまとめている。¹⁰⁾ ビハーラ活動を学ぶ研修生からこのような声が挙がること自体、ビハーラ活動が把握しにくくなっていることの現れと受け止めなければならない。敷衍すれば、その戸惑いは、仏教教団内外や一般市民にも多かれ少なかれ波及しているのではないだろうか。

このような状況を打開するためにも、また研究対象として今日のビハーラ活動を論じる場合の整理としても、ビハーラ活動のどの活動を焦点に論じるかを明確にすることは必須である。その場合、まず拡大しているビハーラ活動そのものを俯瞰的に把握し、全体像を提示した上でいずれかの活動を研究対象として選択する必要がある。

そのような観点から先行研究を窺う時、ビハーラ活動に関する分類に關する論考として、島岩と谷山洋三による考察がある。それぞれを以下に挙げて考察した上で、筆者による分類を提示しておきたい。

①【島岩による分類】

島岩は、ビハーラ提唱から二十年経過した二〇〇五年時点での活動を、文献資料調査によって次の三つに大別している。¹¹⁾

A	長岡西病院のビハーラ病棟をはじめとする病院でのビハーラ運動
B	同朋大学（東本願寺系）の田代俊孝のビハーラ運動
C	西本願寺系のビハーラ運動

Aは、田宮によって提唱された原意としてのビハーラにあたる。すなわち長岡西病院をはじめとしたホスピス・緩和ケア領域における仏教者の活動を指している。

Bは、田代俊孝が「ビハーラ運動」として行っている死の準備教育を指している。これはAやCのような具体的な医療や社会福祉における実践活動とは異なり、医療者や仏教者として一般市民を巻き込んだいのちをテーマにした教育分野における活動である。

Cは、一九八七（昭和六二）年から始まった本願寺派におけるビハーラ活動を指す。これは田宮が企図とした仏教超宗派の活動とは異なった一教団主体のビハーラ活動である。島は本願寺派のビハーラ活動を「終末期医療のみならず、医療や社会福祉分野全般における活動であり、高齢者問題の比重が大きい」と論じている。

②【谷山洋三による分類】

次に谷山洋三によるビハーラ活動の分類を確認していく。長岡西病院においてビハーラ僧として勤務経験を持つ谷山は、様々な宗教的背景と活動領域のビハーラが存在する（あるいは語られる）中で、ビハーラの再定義を行っている。¹²⁾ 方法は、先の島の行っている文献資料調査に加えて、インターネットによる検索調査を採用し、ビハーラ

を標榜する組織を抽出している。その際に、ビハーラを名称とする、もしくはビハーラ活動へ積極的関与を表明していることを条件に加えている。

谷山は、調査結果を踏まえてビハーラ活動を狭義・広義・最広義の3つに分類している。この分類は先行研究でも言及される頻度が高く、また谷山の論文がインターネット上に公開されていることも相まって、広く認知されたビハーラ活動分類と言える。

だが、この谷山論文の発表から時を経ていることから、現時点のビハーラ活動分類としての妥当性を検証する必要がある。本稿ではまず、谷山が研究方法として用いたインターネット検索データを確認して、現在の検索データとの比較・検討をおきたい。

谷山は Google (<https://www.google.com>) を用いて、二〇〇五(平成十七)年五月二日にビハーラの語で検索を行い、四三九〇件を確認している。そのうち仏教と関係する八六件を調査対象として、ビハーラを標榜する組織を大きく医療機関、福祉機関、ボランティア組織、研究/研修など、その他の四部門に分け、その内訳を細かく確認している。

今回、筆者は同様の検索サイトで二〇一九(令和元)年一〇月二日に検索を行った結果、三九二〇〇〇件が確認された。検索数だけで言えば八九倍に増加しているが、実際には同一施設が複数ヒットするケースや同一施設の関連ウェブページ、紹介動画、ビハーラ関連施設の訪問を記事にしたSNSへの投稿、同一の新聞記事など、重複が非常に多く認められた。紙数の関係で詳細は省略し、谷山論文以降に増加した部門と組織数のみを挙げると、ビハーラを名称に採用して開設された医療機関が二つ、福祉機関が六つ、研究/研修が一つ、その他が五つ(内訳として、子育て支援施設、子ども食堂、断食スペース、霊園、ペット霊園管理会社)の増加が確認された。なお、ポ

ランティア組織の増加は確認できなかった。この結果、実質的にビハーラを標榜する組織や研究/研修が増加していることが確認でき、減少している部門はなかった。よって全体の傾向として、ビハーラを標榜する組織は増加していると言える。

次に、谷山によるビハーラ活動の再定義と振り分けられている組織について再確認を行い、筆者から補足を加えておきたい。

狭義	仏教を基盤とした終末期医療及びその施設
広義	老病死を対象とした、医療及び社会福祉領域での、仏教者による活動及びその施設
最広義	災害援助、青少年育成、文化事業など「いのち」を支える、また「いのち」についての思索の機会を提供する仏教者を主体とした社会活動

谷山によれば狭義ビハーラとは、田宮の提唱した終末期医療としてのビハーラを指しており、施設としては長岡西病院と佼成ビハーラが挙げられている。現在では先に筆者が確認したように、あそかビハーラと聖恵ビハーラを追加する必要がある。

次に谷山は広義ビハーラに、藤原胃腸科、ビハーラ花の里病院などの医療施設や、本願寺派のビハーラ活動、日蓮宗のビハーラ活動の活動を挙げている。現在では、この広義ビハーラにおける社会福祉施設に、本門仏立宗建国寺が母体となっている特別養護老人ホーム建国ビハーラ、本願寺派による特別養護老人ホームビハーラ本願寺および同派が組織する高齢者施設連絡協議会に名を連ねるビハーラを冠した高齢者施設、NPO法人ビハーラ21を含め

る必要がある。

最広義ビハラーには、地球人ネットワーク飛騨、ビハラー秋田、ビハラー鹿北、大阪應典院などの活動が挙げられている。ここに田代俊孝のデスエデュケーションとしてのビハラー運動も位置づける必要がある。

また、最広義のビハラー活動に加えるべき新しい動きとして、筆者は日蓮宗僧侶・遠山玄秀が始めたチームビハラーと、子ども支援に関するビハラー活動を挙げておきたい。

まず、関東地方で発足したチームビハラーは、仏教僧侶が主役ではなく、仏教僧侶を含めた医療従事者、介護従事者、葬儀社、士業、有識者らがチームとなつて、当事者・支援者の立場から、共に「死を忌み嫌わず」「どういのちを輝かせるか」を共に考える団体である。その特徴は、供養問題や葬儀社といった葬送儀礼に重きが置かれている点である。これは東京近郊都市部の葬送に関する問題意識が底流にあると考えられる。また、狭義ビハラーにおける多職種連携やチーム医療の視点を、葬送儀礼に活かす意図も垣間見える。これらの点から谷山の最広義のビハラー活動定義に該当する動きとして括っておきたい。

もう一つの新しい動きに、ビハラー彦根による子ども食堂や、大阪府柏原市の子育て支援事業として本願寺派の安明寺ビハラーの家に開設されている「ドレミファごんちゃん」¹⁴を例とした公的機関と連携をした子ども支援が挙げられる。これらは医療福祉などの施設内でのビハラー活動から、昨今の子ども貧困問題や育児の問題に対応し、寺院の公共的機能を發揮して地域の子どもやその親への支援を目的とした新たなビハラー活動の動向として捉えられる。¹⁵

谷山の狭義および広義の定義について変更する必要は感じないものの、現在のビハラー活動が親も含めた子育て支援へと拡大している点を踏まえると、谷山による最広義の定義に若干の修正が必要である。よつて、筆者はビハ

ラー活動の最広義について

災害援助、子育て支援を含む青少年育成、文化事業など「いのち」を支える、また「いのち」についての思索の機会を提供する仏教者を主体とした社会活動と、若干の修正を加えて用いることにしたい。

三、超宗派型ビハラー・中間型ビハラー・教団主導型ビハラー

さて、島と谷山の活動内容に着目した分類に対して、筆者は活動主体を軸とした分類を試みているが、本稿では新たな視点を加え、改めて論じておきたい。¹⁶

ビハラー活動の展開は、田宮が打ち出した超宗派の仏教僧侶による活動だけではなく、伝統仏教教団が宗教的生命力を失いかねないという危機感を持つて取り組んできた一つの成果であり、また教団が培ってきた既存の取り組みを活かしたことが、ビハラー活動の幅広い展開に寄与したと筆者は捉えている。そのような視点から、田宮の意図であった仏教超宗派によるビハラー活動を「超宗派型ビハラー」とし、教団が主導してきたビハラー活動を「教団主導型ビハラー」と分類したが、さらに今回新たに、その中間に位置する「中間型ビハラー」を加えた三つを分類として提示する。代表的な組織や団体を大まかに配当したものが次の表である。

超宗派型ビハラー

長岡西病院ビハラー病棟、ビハラー秋田、ビハラー医療団、福岡聖恵病院ビハラー病棟、チームビハラー

中間型ビハラ	佼成病院ビハラ病棟、ビハラ21
教団主導型ビハラ	本願寺派のビハラ活動、日蓮宗ビハラ・ネットワーク

まず「超宗派型ビハラ」とは、田宮が提唱時から一貫として主張している「一宗一派に偏らない超宗派の活動」という基本姿勢に沿ったビハラを指している。実際の活動においても、具体的な問題解決に向けて、仏教各宗の僧侶や賛同者による連携が指向される点に特徴が見いだせる。しかし、各宗派における教義解釈の相違について議論はなされず、ひとまず棚上げにされている傾向にある。

次に、「中間型ビハラ」であるが、これは教義にもとづいたビハラ活動の定義がなされておらず、教団主導の組織的な活動とも言い難いため教団主導型ビハラに分類することが難しい。また一方で「超宗派型ビハラ」と異なり、(実際には超宗派による活動であっても)教団名を冠している点や特定宗派との繋がりを強く窺わせる側面がある。具体的に言えば、立正佼成会は社会活動の一環として立正佼成会附属病院を有しており、教団名を冠した同病院には日本で二番目のビハラ病棟がある。だが、立正佼成会の教義と病棟理念や活動が直結している訳ではない。また実際の活動には他宗の僧侶も関わっている。

また大阪にあるビハラ21は、以前は超宗派を標榜していたが、現在は真宗大谷派僧侶を中心としたNPO法人である。活動分野としては、ビハラ住宅と呼ばれる施設を開設し、高齢者を中心とした社会福祉領域での活動が活発である。

真宗大谷派関連のビハラ活動については、これまでも田代俊孝による「死、そして生を考える会」が存在し、最広義のビハラ活動として認知されていたものの、教団によって主導され組織だったビハラ活動にまでは至らなかった。しかし、二〇一一年からはビハラ21に所属する真宗大谷派の清史彦や常勤ビハラ僧の三浦紀夫らが中心となり、真宗大谷派全国ビハラ集会(二泊三日)の開催や、東本願寺を会場としたビハラ活動者養成のため¹⁷⁾のビハラぶち修行(一泊二日、年一回開催)が開催されるようになっていく。

このように佼成病院とビハラ21については、超宗派の要素も持ちながら、教団と緩やかなつながりを持っている為、「超宗派型ビハラ」・「教団主導型ビハラ」のどちらかに配当するが難しい。むしろ双方の間の汽水域と¹⁸⁾言えることから「中間型ビハラ」として分類している。

最後に「教団主導型ビハラ」は、一宗派が主体となっているビハラ活動を意味し、教義にもとづく実践理論を基盤とし、教団が主導して組織的な活動を展開している点に大きな特徴がある。この「教団主導型ビハラ」に該当する代表的なビハラ活動として、日蓮宗と本願寺派のビハラ活動がある。本願寺派については次章で論じることとし、ここでは日蓮宗によるビハラ活動について考察しておく。

日蓮宗はビハラ講座を開設し、その修了者によってビハラ・ネットワーク(以下、NVN)が構成されている。NVNは、二〇一一年より活動を開始しており、日蓮宗医療問題研究会による次のビハラ活動の定義を受け¹⁹⁾継いでいる。

医療や福祉や地域社会との連携のもとに、寺院において、自宅において、あるいは病院や施設において、病気や障害、高齢化に悩む人たちと苦しみを共にし、精神的、身体的苦痛を取り除き、安心が得られるよう支援する活動のことです。日蓮宗のビハラ活動は、すべての人びとが仏の教えにふれて仏になることを願い導く法華菩薩行であり、『法華経』『安楽行品』に説かれる安楽の供養をはじめ、六波羅蜜、四無量心、四摂法の実践

であると位置づけられます。¹⁸⁾

日蓮宗によるビハラー活動は、病院に限らず福祉施設や寺院、地域社会全般を対象とし、日蓮宗教義にもつuita日蓮宗僧侶の菩薩行として位置づけられている。¹⁹⁾

また、具体的活動として大きく①お見舞い活動、②病院や施設におけるチャプレンとしての活動、③病院や施設の運営を挙げている。このうち、①については、NVNが制作によって制作された訪問時に渡す病床での簡易写経セットや、日蓮宗教義における病の受け止めをまとめた小冊子が「お見舞いグッズ」として頒布されている。

その他、NVNの活動として、教団の支援による一泊二日のビハラー活動実践講座の開催(年一回)やカウンセリングやグリーンケア、心といのちの講座などが挙げられる。それらの内容を抜粋して編集された『ビハラー・ノート』²⁰⁾には、仏教経典はもとより、日蓮の一連の著作から導かれるビハラー活動の意義や実践方法などが記されている。また日蓮宗のビハラー活動の学術的基盤を、日蓮宗中興の祖である日蓮(一五七二—一六四二)に仮託されて伝わる臨終行儀と仏教的看護の指南書『千代見草』に求め、具体的な病床での実践行動を導き出そうとする姿勢が窺われる。²¹⁾

以上のような活動者養成とその修了者のネットワーク作りや、書籍・小冊子の発行やグッズ販売は、教団の組織力を背景としており、医療や福祉領域のみならず、寺院や自宅へと幅広く実践する活動者を支援するものとして捉えられる。

四、本願寺派におけるビハラー活動の現在

本願寺派による三〇年に渡るビハラー活動については、その二十年間の総括が『ビハラー活動二十九年総括書』²²⁾

および鍋島直樹・奈倉道隆によって論じられている。よって、本稿ではそれ以降の動向を踏まえて、「教団主導型ビハラー」としての特色に焦点を当てて考察を進める。

本願寺派は一九八六(昭和六一)年に「医療と宗教に関する専門委員会」を設置し、翌年に「ビハラー実践活動研究会」を結成し、以降ビハラー活動を組織的に展開して現在に至っている。その同派のビハラー活動の定義に比定できるものは、理念の中に次のようにある箇所である。

仏教徒が、仏教・医療・福祉のチームワークによって、支援を求めている人々を孤独の中に置き去りにしないように、その心の不安に共感し、少しでもその苦悩を和らげようとする活動です。

「仏教・医療・福祉のチームワーク」とあるように、本願寺派のビハラー活動を特色は、田宮の掲げたホスピス・緩和ケア領域にとどまらず、医療全般と高齢者福祉を射程とした活動を謳った点である。また、教団内の僧侶のみならず、門信徒も一体となつて行う活動である点は、先のNVNと異なる特色である。

次に組織的な人材養成として、僧侶と門信徒が机を並べて共に学ぶビハラー活動者養成研修会を京都中心に開催しており、二〇一九(令和元)年で第七期を教える。²³⁾ 幾度かプログラムの見直しが行われ、現在は一年二ヶ月の間に五回の基本学習会と三回の実践学習が実施されている。受講者は研修終了後、各教区ビハラー団体や、広域教区の場合は教区内で細分化された地方ビハラー団体に所属して活動を行うよう組織的に整備されている。

加えてこの研修会は、当初、本願寺派の僧侶・門信徒に向けた教団内部の研修であったが、近年では聴講制度を設けて他宗他派への門戸を開いており、趣に変化が見られる。

こうした教団主導による人材養成に加え、二〇〇八(平成二〇)年四月に同派が設立母体となつて、京都府城陽市に社会福祉法人本願寺龍谷会特別養護老人ホーム龍谷会ビハラー本願寺と、緩和ケアを行う有床診療所として大

日本仏教慈善会財団あそかビハークリニック（現在は一般財団法人本願寺ビハークリニック医療福祉会あそかビハークリニック）が開設されている。あそかビハークリニックは開設当初から、ビハークリニック本願寺は二〇一八年から僧侶が常駐し、患者や利用者のケアにあたっている。また両施設は本願寺派のビハークリニック活動者の実践活動の場所であり、また人材の養成の場として活用されている。特にあそかビハークリニックは緩和ケアを学ぶ医学生や看護学生の臨床実習や、研修を希望する僧侶の適宜受け入れ、龍谷大学大学院実践真宗学研究所による「臨床宗教師研修」など、医療者のみならず僧侶の臨床教育施設としても稼働している。

こうした医療現場に対応する僧侶養成については、本願寺派のビハークリニック活動草創期から課題として提起され、『ビハークリニック活動十カ年総括書』などでも継続的に指摘されている。また、本願寺派内における医療分野のビハークリニック活動の先駆的存在である長倉伯博は、周囲の医療者を始め、患者や家族の期待がある一方、僧侶側の人材不足により応じられない現状を明かし、「早く仲間を増やし、僧侶が参加できるシステムを構築してくれと要請されている」と述べているように、医療者側のニーズに応じられるチャプレン教育に準じた僧侶養成プログラム策定が本願寺派のビハークリニック活動において課題となっていた。

一般紙によって報道されたように、本願寺派による医療福祉における専門僧侶（ビハークリニック）の養成が二〇一七年（平成二九年）九月から「ビハークリニック僧養成研修（仮称）【試行】」という名称で始まり、二〇一九（令和元）年一〇月から第二回目が開催されている。この養成プログラムは臨床宗教師の社会的展開に影響を受け、教団内外から講師陣を招き、教育内容を臨床宗教師研修に近づけている。チャプレンや臨床宗教師と同等の働きを目指し、臨床宗教師の倫理、スピリチュアルケア、宗教的ケア、悲嘆ケアなどに関する「座学」、本願寺派関連施設における「臨床実習」、そこに生育歴や会話記録検討等の「グループワーク」を加えた三つの柱を教育的基盤とした、チャプレンや臨床宗教師の養成プログラムと共通性を持つ実践的な研修内容が盛り込まれている。このような構成である理由は、教団独自のプログラムではあるものの、教団内部のいわば「閉じられた」教育プログラムで良しとするのではなく、修了後に研修生が臨床宗教師の認定取得の為、あるいは自己の継続教育として、国内外・教団外で開催されるチャプレン教育や臨床宗教師教育に参加出来るよう企図されているからである。

筆者もこの研修に第一回目から指導者として携わっており、スピリチュアルケアや諸宗教との宗教間対話等の「座学」と「グループワーク」を担っている。研修を代表する立場ではないが一人の研修担当者として、常々自宗教中心主義から脱却し、広く多くの宗教的立場を尊重する宗教多元主義的態度でケア対象者に臨むよう伝えている。これは他の指導者とも同じ方向性であることを共有しているが、実際問題として臨床現場において自宗教のみでは対応できない場合があることがその理由である。

臨床現場の問題に関わる宗教多元主義について、日高悠登は東京都台東区のアリス「きぼうのいえ」におけるチャプレンと僧侶の協働を調査し、宗教多元主義が共通理解としてあることを明らかにした上で、「宗教多元主義を実際行動に移した先駆的取り組みは規模の大きな教団では未だ実現していない」と指摘する。日高の指摘通り、ケアに関わる文脈において教団による実際行動は未だ実現していない。しかし、このビハークリニック僧養成研修に組み込まれた宗教間対話は、自宗教中心主義とみられがちな教団主導の人材養成に宗教多元主義的観点を取り入れ、他宗教への配慮を検討し、異（他）宗教間ケアの実現を目指すものであり、実際の協働に移す為のいわば準備段階として位置づけられる取り組みとして、教団が行っていると言える。

試行とはいえ、このような「教団主導型ビハークリニック」によるビハークリニック僧養成研修は、開設十周年を迎えた本願寺派関連の施設群を実習先として十全に活用し、宗教的に「開かれた」方向性を持った教育プログラムによる専門職養

成の段階に入ったことを示すメルグマールと捉えられよう。⁽²⁹⁾

以上のように、ソフト・ハード両面からのビハラー活動の進展は、教団の組織力に依るところが大きい訳だが、その推進力たる教団内におけるビハラー活動実践の為の教義的基盤の形成と、その後の本願寺派におけるビハラー活動研究の動向に若干触れておく必要がある。

本願寺派が「ビハラー活動活動二〇カ年総括書」において、「ビハラー創造の時代」と「ビハラー教区展開の時代」とする一九八〇年代後半から一九九〇年代までは、ビハラー活動への賛否を含め、真宗教義とビハラー活動の関係性をいかに論じるかという文献学的研究にもとづく教義学的議論が盛んであった。⁽³⁰⁾ それら真宗教学におけるビハラーの教義学的議論は、ビハラー活動のパンフレットなどを通して伝播され、ビハラー活動がホスピス・緩和ケア領域に由来することから生じる他宗の強調する臨終行儀との混同や、実践活動が自力作善として誤解されかねないという懸念を払拭し、真宗教義に則したビハラー活動へ踏み出すことに繋がった。

さらに、本願寺派が「ビハラー見直し時代」と表現する二〇〇〇年以降、研究動向に変化が見られるようになった。従来通り教義との関連性にもとづく研究が深化する一方で、本願寺派のビハラー活動の展開に沿う格好で研究方法が多角化し、臨床実践に即した研究が増加している。

例えば、民俗学による福永憲子、深水顕真や猪瀬優理による社会学の手法を用いたビハラー活動のフィールドワークが挙げられる。⁽³¹⁾ 特に深水・猪瀬の研究は広島県のビハラー活動団体を取り上げ、さらに猪瀬は仏教婦人会活動としてのビハラー活動に光を当て、僧侶・男性中心であったビハラー研究に新たな基軸を導入した。心理学的研究方法では、早島理・横尾美智代の共同研究や伊藤秀章に代表される組織的教育であるビハラー活動者養成研修会の受講生を対象にしたアンケート調査、⁽³²⁾ 友久久雄・吾勝常行・児玉龍治らによるビハラーとカウンセリングに関する一

連の研究、⁽³³⁾ 打本未来によるビハラー活動者への質的調査研究が挙げられる。⁽³⁴⁾

また、あそかビハラー設立以降に顕著な傾向として、長倉伯博、花岡尚樹、徳永道隆、筆者らによってビハラー僧あるいはそれに等しい活動経験を元にした医療や福祉領域における臨床実践的論考が発表されている。⁽³⁵⁾

特にあそかビハラーからは、日本死の臨床研究会や日本緩和医療学会、日本仏教看護・ビハラー学会などの各種学会において、事例研究や多職種による共同研究が継続的に発表され、これまで長岡西病院が牽引してきたビハラー活動の臨床実践研究に新たな視点を提示している。⁽³⁶⁾

小 結

ここまで簡略ではあるが田宮によるビハラー提唱以降、活動が多様化したビハラーに対する分類について特に谷山論文を再検討し、谷山の最広義のビハラー活動定義について修正を加えた。また筆者独自のビハラー活動分類として、超宗派型・中間型・教団主導型ビハラーを提示した。

特に「教団主導型ビハラー」である本願寺派のビハラー活動について人材養成と研究動向の二つを取り上げて概括し、人材養成においては、関連施設での臨床実習を含めたビハラー僧養成研修を開始し、新たな局面を迎えていることを指摘した。

また研究面においては、真宗教学におけるビハラーの教義学的議論を経て、幅広い領域での実践活動へ展開したこと、またそれが契機となり、広範な活動を対象とした研究領域の拡幅と方法論の多様化の起点となったことを明らかにした。⁽³⁷⁾ 個々の研究が推進されることにより、各種学会における本願寺派のビハラー活動のみならず、結果的にビハラー活動全体の認知度向上に繋がっていくことが予測される。ビハラー活動は日本の仏教者による社会活動

として、これからも注目を集めるだろう。

いずれにせよ、この先もビハラー活動の実情を定期的に確認し、必要に応じて再定義や再分類が求められるだろう。その際に、本稿で論じた新たなビハラー活動の分類を補助線とした議論がなされればと思う。

【付記】本稿は、平成三十年年度科学研究費助成事業基盤研究(C) (課題番号) 18K0083 (研究課題名)「医療現場における宗教者による「無宗教」者支援の実態と可能性」研究代表者山本佳世子)の助成を受けた成果の一部である。また、「世界仏教文化研究センター応用研究部門」二〇一六年度研究活動報告書「所収の拙稿「ビハラーの展開と「ビハラー僧」を元に、大幅に加筆修正を行ったものである。

註

- (1) 島蘭進「現代社会学ライブラリー8 現代宗教とスピリチュアリティ」弘文堂、二〇一二年、一二七―一二八頁参照。
- (2) 田宮仁「淑徳大学総合福祉学部研究叢書25「ビハラー」の提唱と展開」学文社、二〇〇七年、三頁。
- (3) 田宮前掲書、三頁。
- (4) 医療法人崇徳会長岡西病院・医療の心を考える会パート3「日本のターミナルケアを問う―長岡雅ビハラー・ターミナルケア20年!」考古堂、二〇一四年、七八頁。
- (5) 聖恵ビハラーについては、拙稿「新たなビハラー病棟に思う」(龍谷大学宗教部「宗教部報りゅうこく」第九九号、二〇一七年)をご参照頂きたい。
- (6) 権澤顕正「ふらっとビハラー病棟へ」『日本仏教看護・ビハラー学会第十五回年次大会プログラム・予稿集』、二〇一九年、一九―二〇頁。
- (7) 高齢者施設における利用者の宗教的ペインについては、拙稿「特別養護老人ホームにおける喪失―ビハラー僧の視点から―」高木慶子・山本佳世子編「悲嘆の中にある人に心を寄せて」所収、上智大学出版、二〇一四年)をご参照頂きたい。

(8) 田宮前掲書、一頁。

(9) 田宮前掲書、三頁。

(10) 早島理・横尾美智代「ビハラー活動者の現状と展望―本願寺ビハラー活動者養成研修会のアンケート調査をもとに」『浄土真宗総合研究』六号、二〇一一年。

(11) 島岩「仏教的ターミナルケアとしてのビハラー運動」『北陸宗教文化』一七号、二〇〇五年、一三八頁。

(12) 谷山洋三「ビハラーとは何か?―応用仏教学の視点から―」『パブリック文化学』一九号、二〇〇五年。

(13) 遠山玄秀「スピリチュアルケアの今、そして未来―チームビハラーの設立―」(『仏事』第一四巻四号、二〇一四年)他参照。

(14) 武富緑「親子広場ドレミファごんちゃん0歳からの憩いのおうち安明寺ビハラーの家」クリエイツかもがわ、二〇一七年。

(15) 「ドレミファごんちゃん」については奈倉道隆も取り上げており、子育て支援に寺院の機能を活かしたビハラー活動として検討することを提言している。奈倉はこの他に神奈川県横浜市にある善了寺によるデイサービス「還る家」ともに「や、大阪府池田市如来寺による「グループホームむつみ庵」を本願寺派のビハラー活動として取り上げている。本研究方法では、例えば「西本願寺医師の会」のように、ビハラーを冠していない取り組みが調査対象から外れるという限界がある。奈倉が指摘するビハラー活動と同様の取り組みの扱いについては今後の課題である。(奈倉道隆「浄土真宗本願寺派におけるビハラー活動とその現代的意義」『日本仏教社会福祉学会年報』第四〇号、二〇一一年)

(16) 拙稿「ビハラー活動の展開と「ビハラー僧」」『龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター』二〇一六年度研究活動報告書、二〇一七年。

(17) 超宗派を標榜していた頃のビハラー21は、初級編・中級編・上級編によって構成されたビハラー僧養成研修会というビハラー僧養成プログラムを開催していた。初級編は座学講義、中級編はシェアハウス中井での臨床研修とグループワーク、上級編は長岡西病院ビハラー病棟での臨床研修とグループワークで構成されていた。中級・上級編の臨床実習指導ならびグループワークは、真宗大谷派やビハラー21独自のプログラムではなく、臨床スピリチュアルケア協会がビハラー21からの委託を受けて開催しており、窪寺俊之(日本基督教団)や谷山洋三(真宗大谷派)、大河内大博(浄土宗)、森田敬史(融通念仏宗)らとともに筆者も長岡西病院におけるグループワークに協力していた経緯が

ある。臨床スピリチュアルケア協会は、米国の臨床牧会教育を日本の教育事情に適應させたプログラムを関西で展開している団体であり、その臨床教育法は、現在行われているスピリチュアルケア師養成や各大学の臨床宗教師研修に影響を与えている。臨床牧会教育の影響の一端が、臨床スピリチュアルケア協会を介してビハラ21のビハラ僧養成プログラムに波及していたことは注意しておいて良い。

- (18) 日蓮宗医療問題研究会「ビハラ活動の推進」『現代宗教研究』第三五号所収、二〇〇一年、六四頁。
- (19) より詳細には、奥田正毅「日蓮宗のビハラ活動―その理念と意義―」『現代宗教研究』第三七号、二〇〇三年がある。

- (20) 日蓮宗ビハラ・ネットワーク『ビハラ・ノート』日蓮宗ビハラ・ネットワーク発行、二〇一一年。

- (21) 柴田寛彦・秦孝悦・金光浄・村瀬正光「千代見草―仏教看護と臨終行儀―」日蓮宗新聞社、二〇一一年。

- (22) 浄土真宗本願寺派社会部社会事業担当ホームページ「ビハラ活動二〇〇〇年総括書」<http://socialhongwanji.or.jp/html/c11p9.html>、二〇一一年一月二二日アクセス。

- (23) 鍋島直樹「親鸞の生命観―縁起の生命倫理学―」(法蔵館、二〇〇七年)、奈倉前掲論文。

- (24) また、本願寺派のビハラ活動における対人援助技法として、西光義敬の提唱した真宗カウンスリングの一端がビハラ活動者養成研修会において教授されている。このあたりも本願寺派のビハラ活動を特色づけるものと言えよう。

- (25) 長倉伯博「緩和ケアチームにおける僧侶の実践」『季刊仏教五―特集介護と仏教福祉―』所収、法蔵館、二〇〇〇年、一五五頁。

- (26) 産経新聞 west「医療・福祉の専門僧侶養成へ、病院や施設へ心のケア活用」http://www.sankei.com/west/news/170105/wst1701050035_n2.html、二〇一七年二月二二日アクセス。

- (27) 研修には、研修生と諸宗教者との宗教間対話として、日本基督教団室町教会(浅野献一牧師)と天理教本部ならびに天理よろず相談病院(事情部職員)を会場とした宗教間対話プログラムが含まれている。なお、前者を会場とした宗教間対話のコーディネートは筆者が動めている。

- (28) 日高悠登「狭間のケア提供者―チャプレンとビハラ僧に着目して―」『宗教と社会貢献』六(二)、二〇一六年。

- (29) しかしながら、こうした人材養成は「ビハラ活動の職業化」でもあり、「ビハラ僧」という名称をはじめ、教

団内における位置づけや一般活動者との関係性など議論の余地がある。また臨床宗教師等とも共通する問題として、こうした宗教者の活動が世俗化した医療制度に取り込まれ、医療資源として宗教者が市場で消費される危険性が潜んでいる。また一方で、宗教界全体に渡る後継者不足に起因する人材難が予測される。

- (30) 梯実圓、奈倉道隆、鍋島直樹、渡辺了生、塚田博教らがいる。特に鍋島は、ビハラ活動の教義学的基盤についてまとめ、柱として「摂取不捨」「不請の友」「慈悲喜捨」「縁起的生命観」を挙げている(鍋島前掲書、三五八―三六一頁参照)。

- (31) 福永憲子「最期にビハラは何ができるか―日本の看取りとビハララの展開―」(自照社出版、二〇一五年)、深水顕真「ビハラ活動の現状と課題」(『広島法学』二五―二、二〇〇一年)、猪瀬優理「仏婦がつくる地域―ビハララの可能性―」(櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視座から』所収、二〇一六年)。

- (32) 伊東秀章「ビハラ活動の臨床心理学的考察」(龍谷大学機関リポジトリ、二〇一四年、<http://hdl.handle.net/10519/5530>)、早島・横尾前掲論文参照。

- (33) 友久久雄・吾勝常行・児玉龍治編「ビハラ入門―生老病死に寄り添うために―」(本願寺出版社、二〇一七年)などがある。

- (34) 打本未来「ビハラ実践者の活動を支える思想―浄土真宗本願寺派僧侶のインタビュー調査から―」(藤能成編著『仏教と心理学の接点―浄土心理学の提唱』所収、法蔵館、二〇一六年)。

- (35) 長倉前掲論文および同氏「ミトルヒト」(本願寺出版社、二〇一五年)、徳永道隆「いのちを見つめるとは―緩和ケアにおける僧侶の役割―」(龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター二〇一五年度報告書、二〇一六年)、拙稿「医療福祉現場におけるビハラ僧の現代的役割について」(『宗教研究』八三巻第四輯、二〇一〇年)、拙稿「終末期医療におけるビハラ専門僧についての一考察」(『真宗学』二二三・二二四合併号、二〇一一年)。

- (36) 例えば、花岡尚樹「生と死の意味を支える―宗教的に関わった三事例―」(『緩和ケア―特集今、改めて宗教的ケアを捉え直す―』vol.22, No.3、青海社、二〇一二年)、花岡尚樹・鍋島直樹・打本弘祐・山本成樹・松永徳成・大嶋健三郎「医療現場における臨床宗教師の役割と課題」『死の臨床』四〇号二巻、二〇一七年、がある。

- (37) なお、本願寺派のビハラ活動の展開については、同派内における近代以降の積極的な社会事業への取り組みの一部が、地下水脈の如く流れていることを覚えておきたい。それらについては中西直樹「仏教と医療・福祉の近代史」

近世における真宗の歴史的研究の先駆

— 玄智『大谷本願寺通紀』 —

岩 田 真 美

はじめに

一般に日本の仏教研究者が歴史学の方法論を導入し、仏教の歴史的研究が行われるようになるのは近代以降のことである。東京帝国大学で仏教を講じた村上專精(一八五一—一九二九)は一八九四(明治二七)年に学術雑誌『仏教史林』を創刊し、アカデミズムにおける仏教の歴史的研究を確立したといわれる¹⁾。そして、村上は通宗派的な仏教の教理史研究を開拓していくこととなる。一方で村上は真宗の通史的研究として『真宗全史』のような成果も著しているが、その序文のなかで、

然るに古来或は宗祖の伝を録し、或は蓮如の行実を記し、又は二十四輩の由来を示すが如き、一局部の史伝なきにあらざれども、全部に通じての真宗史は甚稀なり、全部に通じての真宗史としては、玄智の本願寺通紀あり、是れ恐らくは真宗史中の傑作なるべし²⁾。

と述べている。すなわち近世西本願寺の御堂衆(堂達)であった玄智(一七三四—一七九四)が著した『大谷本願寺通紀』を「全部に通じての真宗史」であり、明治時代以前における「真宗史中の傑作」だと評価しており、こう

- Study on Controversy as to Whether Children (from Fetus to Adolescence) Can Be Born in Pure Land (3)
;about Organizing the Controversy, and the Significance it BroughtKenjun Inoue (187)
- A Study of Anotated Editions of Wu Liang Shou Jing and Its Practical UseDaigo Sasaki (215)
- The Current Status of Vihāra Activity
.....Koyu Uchimoto (239)
- Rethinking the Birth of Historical Research into Shin Buddhism: A Study of Genchi's *Otani Honganji Tsuki*
.....Mami Iwata (263)
- An Examination of the Word "Amanyudo" in *Gobunsho*: Focusing on it's One Word Theory and Two Words Theory
.....Junshi Noumi (281)
- The Concept of Tong in Shandao's Works.
Comparison with Sanjie-jiao Texts.
.....Junshin Uchida (297)
- Toyo Engetsu's Incident of Heterodoxy: Looking at What Happened Before and After the Incident
.....Ichido Kikukawa (321)
- A Research on the Missionary Institute of Nishi Hongwanji and its Thought which Faced Marxism around 1930
.....Kota Uchide (347)
- What is Preached for a Students? : Mainly Catuḥśatikā Chapter8 by AryadevaYutaka Kanazawa (29)
- Genshin's Discovery of the Easy Way to Receive Confirmation for Enlightenment in the Present Life
.....Eisho Nasu (13)
- Japanese Buddhists Activities in South Asia Seen in the Magazine of *the Kaigai-bukkyo-jijo* (『海外仏教事情』1887-1893)
.....Mitsuya Dake (1)

Japanese Buddhists Activities in South Asia Seen in the Magazine of *the Kaigai-bukkyo-jijo* (『海外仏教事情』1887-1893)

Mitsuya Dake

0. Introduction

The historical relationship between India and Japan can be traced back to the 6th CE when Buddhism was introduced to Japan via Korea Peninsula. Following this, an Indian monk, Bodhisena (704?-776?) came to Nara to conduct the eye-opening ceremony of the Great Buddha Todai-ji (東大寺大仏開眼供養) in 752. In the medieval time, *Gotenjiku-zu* (五天竺圖), 'Map of the five regions of India' was produced based upon Buddhist sutras to indicate the root of Buddhist pilgrims from China to India. As Buddhism permeated in Japanese society, India was yearned as the motherland of the Buddha by Buddhist monks in medieval time. However, direct contact of Japanese Buddhist with Indian people except Bodhisena's visit to Japan was realized only as early as after the Meiji Restoration of 1868.

Japanese Buddhism faced a fateful crisis of challenges during the time of Meiji Restoration when the feudalistic Tokugawa regime collapsed and the ancient imperial rule was restored. The new Meiji govern-

ISSN 0288-6480

真宗學

第 141・142 合併號

龍溪章雄教授
退定年職記念特集號

— 浄土仏教と親鸞教学 —

令和 2 年 3 月

龍谷大學 真宗學會

真宗學
141・142 號
龍溪章雄教授退定年職記念特集號
龍谷大學真宗學會

SHINSHUGAKU

JOURNAL

—OF—

SHIN BUDDHIST STUDIES

Nos. 141・142

March 2020

Commemorative Issue

in Honour of

Professor TATSUDANI, Akio

Pure Land Buddhism
and Shinran's Teaching

SHINSHU GAKKAI

Research Association of Shin Buddhist Studies

Ryukoku University

Shichijo Omiya, Shimogyo-ku

Kyoto, Japan

『真宗学』第一四一・一四二号合併号をお届けします。本合併号は、三月に定年退職を迎えられる、龍溪章雄先生・貴島信行先生の退職記念号として出版するものでもあります。ご多用の中、玉稿を賜った諸先生には深くお礼申し上げます。龍溪章雄先生は、短期大学部で二十年間、その後文学部で十五年間、合わせて三十五年間の長きにわたり、学部生・大学院生の指導にあたってこられました。その間に、実践真宗学研究科長などの要職を務められ真宗学科の発展に大きく貢献されてきました。

龍溪先生のご専門は、近代における真宗教学史ですが、教学史と言えば真宗列祖の研究や近世江戸時代の宗学についての研究が中心であった時期に、近代真宗教学史を真宗学における一研究分野として開拓されてきたのは先生に他なりません。特に、近代的な真宗学方法論の展開史や、前田慧雲、金子大策といった近代を代表する真宗学者の歴史的・思想的な実像についての龍溪先生の研究は、内外からも高い評価を得られました。

貴島信行先生は二〇一二年に実践真宗

学研究科教授に就任され、真宗伝道学や布教実践に関する授業等を担当されてきました。長年にわたるご自身の豊富な伝道実践の経験に裏打ちされた貴島先生の授業は、その温厚な人柄とも相まって、多くの学生たちの伝道への関心を誘発してきました。

今年度をもってご退職されるお二人の先生方は、いずれも真宗学の中でも新しい研究分野に取り組んで来られた先生方です。そのお二人が去られることは真宗学教室にとって大きな損失でもあります。ただその学恩に報いることは、お二人が蒔かれた新たな芽を大切に育て、その思いを受け継ぐ人材を輩出することにあると考えております。お二人の先生には、ご退職後も健康に留意されますとともに、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

なお、末筆になりましたが、記念号の編集に際しましては、編集委員会の能美潤史先生をはじめ、運営委員会の院生の皆様には多大なご協力を頂きました。この場を借りて厚く感謝申し上げます。

（嵩 満也）

平成三〇年度 真宗学関係研究論文目録

【付記】ここに掲載しました論文は、平成30(2018)年4月より平成31(2019)年3月までに発表されたものです。掲載漏れの論文も多いかと思いますが、何卒ご容赦下さい。この目録は龍谷大学図書館に収蔵されている雑誌を中心に集めております。もし掲載漏れ・誤植等お気づきの際には、お手を煩わせますが、真宗学会までご連絡頂ければ幸いです。

令和二年三月五日印刷
令和二年三月十二日発行

編集者 真宗学会
編集委員

（禁 転 載）
転 発行者 真宗学会長
深 川 宣 暢

印刷所 (株)印刷 同朋 舎

〒101-8266
京都市下京区七条大宮

発行所 龍谷大学真宗学会
電話 (0)75-741-3131
振替 02601618746番

取次店 永田文昌堂
振替 0260161936番